OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パーソナリティの精神的健康に関する考察 : 概念と実証的調査による検証
Author(s)	鎌田, 靖子
Citation	大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 71-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9711
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第7号（2002年）
Annals of Educational Studies Vol .7

パーソナリティの精神的健康に関する考察
－概念と実証的調査による検証－

鎌 田 靖 子

【要旨】
本稿では、人間性の健康的側面を心理学的に概念化したG.W.オルポートとA.H.マスローの研究を取り上げ、「パーソナリティの精神的健康」に関する考察をおこなうことを第一の目的とする。オルポートは「パーソナリティ論」を、マスローは「動機づけ理論」を確立する過程で、各自が理想とするパーソナリティ・モデルを見いだし、オルポートは「成熟したパーソナリティ」の6個の基準として、マスローは「自己実現的人間」の15個の基準として提案している。彼らの基準の妥当性を検証するために、質問紙調査を実施した。この際、情緒障害の判別基準である「コーネル・メディカル・インデックス（CMI）」を通じて、「正常群」と「神経症群」に分類し、正常群にみいだされる精神的健康の要因を明らかにした。さらに、精神的健康の発達プロセスを検討するため、異なる年齢群の比較をおこなった。このような質問紙による実証的調査の結果を報告することが本稿の第二の目的である。

1．目的

現在、若年層による凶悪な犯罪が社会問題となっている。これは、過剰な情報、氾濫する物質などで社会環境が無秩序となり、若者たちが「生きる実感」をみいだせず、彼らのパーソナリティが空洞化しているためと懸念される。

心理学はこれまでこのような問題に対処するため、人間性の病理的側面に着目し、神経症・精神病を対象に盛んに研究をおこなってきた。しかし、それとは対照的に人間性の健康的側面が注目され、「パーソナリティの精神的健康」の研究も一部の研究者によって進められている。本稿では、限られた先行研究の中でも、特に、G.W.オルポート(Gordon W. Allport 1897-1967)とA.H.マスロー(Abraham H. Maslow 1908-1970)による「精神的に健康なパーソナリティ」の研究を考察する。そして、今日の病理現象を異なった角度からとらえ直す機会としたい。

オルポートは、それまでのパーソナリティに関する厖大な、かつ広範囲の研究を1937年の文献 *Personality: a Psychological Interpretation* にまとめ報告したが、その後も訂正を繰り返し、新たな文献 *Pattern and Growth in Personality* として1961年に出版し直すことで、厳密な彼独自のパーソナリティ論を確立した。長期にわたる推敲と執筆を通じ、オルポートが見いだしたのは、いかなる人間も「独自な成長潜在性（unique potential for growth）をもった存在」であり、常に「型態を備え成長しつつある体系(patterned and growing system)」(Allport,1961,p.xii.邦訳p.iv.）とし、それをパーソナリティ（personality）という言葉で表現した。また、パーソナリティの成長・成熟の心的メカニズム、動機の変容(transformation of motives) 過程を明らかにした。さらに、成熟の完成した理想のパーソナリティ・モデル「成熟したパーソナリティ（Mature Personality)」にみいだされる基準を提案した。このように長期的かつ慎重な研究の成果であるオルポートのパーソナリティ論と成熟のモデルは、筆者が精神的に健康なパーソナリティの概念的考察をおこなう足場として、申し分ないと思われる。

他方、マスローも、パーソナリティの概念化をおこなった。彼の場合は、パーソナリティを成長に導く動機「成長動機（growth motives)」と成長とは関連のない動機「欠乏動機（deficit motives)」を区別した。これがマスローの「動機づけ理論（motivation theory)」の特徴である。成長に動機づけられる状態とは、努力を必要とする苦しい過程であるため、多くの場合避けられてしまうが、これは、あらゆる人のもつ「より崇高な性質（higher nature）であり、また、本能に似た、すなわち人の本質の部分（instinctoid,i.e., part of his essence)」[1] (Maslow,1954,p.75.邦訳p.47.）と考える。彼は、動機の種類に応じてパーソナリティ

が異なった様式で影響を受けることを明らかにした。さらに、成長を成し遂げた理想のパーソナリティ・モデル[2]「自己実現的人間（Self-Actualizing People）」にみいだされる基準を提案した。オルポートの研究と同様、筆者が精神的に健康なパーソナリティの概念的考察をおこなう上で、不可欠な先行研究と思われる。

本稿では、オルポートとマスローによる精神的に健康なパーソナリティを概念的に考察することを第一の目的とする。また、彼らの概念の妥当性を検証するために、質問紙による実証的調査をおこなった。情緒障害の判別基準「コーネル・メディカル・インデックス（CMI）」を用い、正常群にみられる「パーソナリティの精神的健康」の要因を測定した。このような実証的調査を通じ、精神的に健康なパーソナリティの心理学的モデルがより妥当性をもつよう試みた。その報告をおこない、今後の研究の展望と課題を探ることを本稿の第二の目的とする。

2．オルポートのパーソナリティ論

（1）パーソナリティのとらえ方と定義

現代心理学は「心の科学」といわれるほどに、人間の中に一般にみられる傾向、つまり普遍的法則の探求に努めてきた。他方、オルポートが研究の対象とするのは、独自な成長潜在性をもった存在としてのパーソナリティである。つまり、全般的に心理学の傾向が「普遍性」の追求にあるのに対し、オルポートは「独自性」を対象とした。しかし、オルポートの研究は今日においても心理学的意義を十分にもっている。それは、彼が常に普遍性から独自性へ、独自性から普遍性へと両者の間を行き来しながら研究をおこなっていたためである。たとえば人間の生理・神経組織を対象に、パーソナリティの“すべての人と同じ”側面を扱い、「普遍的標準（universal norms）」を研究した。また、固有文化を対象に、パーソナリティの“幾人かの人と同じ”側面を扱い、「集団的標準（group norms）」を研究した。さらに、個人を対象に、パーソナリティの“どの人とも異なる”側面を扱い「個人的標準(idiosyncratic norms)」[3]を研究した（Ibid.p.13.邦訳p.15.）。

本稿では、主に普遍的標準と個人的標準に焦点を合わせることにする。本稿の目的は、精神的に健康なパーソナリティの概念図を明確にすることであり、「精神的な健康」を享受する道程は個々人が独自な方法で成し遂げていくため[4]、個人的標準だけを取り上げても良いかと思われるが、オルポートは成熟に至った各々のパーソナリティには普遍性があるとし、「成熟したパーソナリティ」の６個の基準をみいだしている。

さて、人間を表現するために、オルポートがパーソナリティという言葉を用いる理由を考えてみたい。オルポートによると、人間を表す用語にパーソナリティとキャラクターの二つがある。パーソナリティは、ラテン語のペルソナに由来する。これは、舞台で俳優が着用するマスク（mask）を意味し、「外面的効果（external effect）」を指す。しかし、同時に、仮面の背後にある役者自身を意味し、「内面的構造（internal structure）」を指すこともある。つまり、パーソナリティの言葉自体が、人間の外面性と内面性という正反対の意味をもつ。他方、キャラクターは、ギリシア語のカラクテールが語源である。これは彫る・刻む（engraving）を意味し、このような行為を通じて「生得の基礎的構造（inborn, and basic structure）」が現れる様子をいう。つまり、人間の固有の性質、内面性をいう（Ibid.p.31.邦訳p.38.）。このように異なる意味を包含するパーソナリティとキャラクターの中から、オルポートがあえてパーソナリティを用いた理由は、内面的構造を有すると同時に「外に実在する（out there）」一つの単位を必要としたためである。実際に、彼がパーソナリティに与えたより詳細な定義にもこの点が示されている。

> 「パーソナリティとは、個人の中にあってその人に固有の行動と考えとを決定するダイナミック（dynamic）な心理身体的体系（psychophysical systems）である」（Ibid.p.28.邦訳p.34.）

この定義の中で、着目すべき点は二つある。まず、パーソナリティは個人の“心理身体的体系”として

いる点である。これにより、オルポートは、パーソナリティが精神・心理的（psych）な「内面性」と身体的（physical）な「外面性」を備えた包括的なシステムととらえていたことが示されている。次に、パーソナリティを“ダイナミック（動的）な体系”としている点である。ここから、パーソナリティを絶えず変化し、形成し続ける体系ととらえていることが示されている。

（2）パーソナリティの成熟過程

オルポートの定義により、個人に固有の心身活動を生みだし、永続的に形成される体系がパーソナリティであると理解された。

次に、パーソナリティが成熟の方向へと形成されていく過程を考察していきたい。オルポートは「動機の変容」に注目する。彼は、動機を個人独自の活動や考えを生みだす「内的条件」とする。このとらえ方によると、心身ともに未熟で保護者に依存して生活する新生児に動機が発達しているとはいえない[5]。しかし、成長を通じ、両親や周囲の人々から影響を受けながら、個人の動機が発達していく。つまり、青年期・成人期に至り、社会から個としての責任を問われるようになると、それまでの依存した状態から独立し、自己決定的な自立した（independent）動機を発達させることとなる。

しかしながら、この段階のパーソナリティであってもオルポートの意味する成熟には至っていない。というのも、オルポートは成熟したパーソナリティにみられる動機は質的に変容していて、「機能的に自律（functional autonomy）」しているという。この機能的に自律した動機を説明するために、オルポートは、個人の興味（interest）が発展した例を検討している。それは、何らかの技能を学んでいる人が、学んでいるうちに技能そのものに興味を示し、自らに最も相応しい表現手段として取り入れていく、いわゆる「職人気質（workmanship）」にみられるような例である。もしかすると、学び始めた頃は収入を得ることが目的であったかもしれないが（最初の動機）、お金に困らなくなってからも止めることができず、またいい加減な仕事で満足できなくなる。つまり、技能をおこなうこと自体が目的となっている状態（自律した動機）である。このように自律して機能する動機とは、パーソナリティに一貫して強い影響を与え、個人の独自な生き方や考え方[6]を育む。また、パーソナリティをより調和させ（congruent）、完全な方向へと導いていく。このような過程がパーソナリティの成熟とオルポートは考えたのである（Ibid.p.227.邦訳p.286.）。

（3）「成熟したパーソナリティ」としての精神的健康

成熟したパーソナリティでは、高度に自律した動機が存在し、パーソナリティの独自性を強める役割を果たしていることが理解される。このように、完全な成熟に至ったパーソナリティにみられる普遍的基準をオルポートは提案する。順に①自己意識の拡大（extension of the sense of self）、②暖かい対人関係（warm relating of self to others）、③情緒的安定（emotional security）、④現実的な知覚、技能および課題（realistic perception, skills and assignments）、⑤自己客観視（self-objectification）、⑥統一した人生観（unifying philosophy of life）の６個である（Ibid.pp.283-304.邦訳pp.360-87.）。

各基準は後半の実証的調査で利用されるため、少し詳細に検討しておこう。①は、自己に固執する態度とは反対に、自分の感覚・興味が外に広がり続けていることをいう。②は、他人と親密な（great intimacy）あるいは共感的な（sympathy）な関わり方をし、暖かみある関係を築くことをいう。③は、自らの内部に生じる情動に過剰に反応せず、情緒的に安定していることをいう。④は、現実を正確に知覚し、また現実に働きかける何らかの技能や課題をもっていることをいう。⑤は、時には冷静に洞察（insight）をおこない、また時には暖かくユーモア（humor)をもちながら自分を客観視できることをいう。⑥は、自らの行動や考えに一貫性をもたらすため内部に確固とした価値観があることをいう。

以上のような要因をもったパーソナリティをオルポートは精神的に健康ととらえる[7]。

3．A.Hマスローの動機づけ理論

（1）パーソナリティのとらえ方と動機

他方、マスローはパーソナリティの成長をとらえるにあたり、成長に導く動機と成長とは関連のない動

機を区別した。

一般に動機づけ理論では、動機づけられたパーソナリティの内部で生じる変化を次のようにとらえる。まず、体内に何らかの欠乏が生じたために（例：体温の低下）、それを満たそうという欲求が動機となりパーソナリティは行動する（例：上着を着る）。この理論では、欠乏という緊急事態を解決するためパーソナリティは動機づけられ、緊急事態が解決すれば動機も解消すると考える。しかしながら、マスローの動機づけ理論の特徴は、欠乏が充足されても解消されないような欲求が存在するという点にある。前者のように欲求が満たされると解消する動機を「欠乏動機」、解消されない動機を「成長動機」と名づけ区別した。これらの動機を詳しく考察する前に、パーソナリティと動機づけの関連をマスローがどのようにとらえていたのかを考察しておこう。

マスローによれば、動機づけはパーソナリティの一部分ではなく、全体に生じる。特に、大きな喜び・創造的な出来事にたずさわっている時、あるいは重大な問題に直面している時、パーソナリティは個人全体としての欲求（need of the individual）に支配され（dominated）、一個の有機体（organism）[8]として完全な統一体（integrated whole）へと統合される。しかしながら、常にパーソナリティ全体が動機づけられ完全な統一を保っていると考えるわけではない。過度な緊張感やプレッシャーをともなうような統合が生じた直後は、パーソナリティは目的のない、なすがままの行動をおこなう。この際のパーソナリティは、動機づけられていない（nonmotivated）状態に近い。また、パーソナリティ自体の対処能力が不十分な場合は、統合が分裂され動機づけは失敗に終わる（Ibid.p.75.邦訳p.47.）。

（2）欠乏動機と成長動機

さて、マスローの動機づけ理論の特徴である「欠乏動機」と「成長動機」に戻る。既に考察したように「欠乏動機」は欠乏が充足されれば解消されるもので、食欲、睡眠・休息の欲求など身体上の欠乏が原因で生じる場合が多く、一般的に「生理的欲求」とも呼ばれる。しかし、生理的な衝動に結びつかないような欲求もある。たとえば、愛情の欲求、所属への欲求などであり、これらは人間が社会生活をする上で普遍的な欲求であるため「社会的欲求」とか「パーソナリティ欲求」と呼ばれることもある。マスローは、生理的、社会的欲求の双方は個人の生命維持にとって基本的な欲求であるため、これらを包括して「基本的欲求（basic needs）」と名づけた。

もう一方の「成長動機」は、充足されることなく永続的にパーソナリティを動機づけるような欲求を指す。たとえば、遊びに夢中になる子ども、創作活動をおこなう芸術家の情熱といったものは飽和されることはなく、次なる行動へと駆り立てていく。マスローはこのような状態を「完全を目ざして成長する（grow to perfection）」、「発展している（develop）」といい、この種の動機をメタ動機（metamotivation）と呼び、上述の欠乏動機とは質的に全く異なるとした（Ibid.p.133.邦訳p.237.）。

そして、後者の成長動機によって動機づけられているパーソナリティをより「心理的に健康（psychological health）」とし、またそのような人々を「自己に備わった資質（stature）を完全に実現する人々」ととらえ、「自己実現的人間」と名づけた。

（3）「自己実現的人間」としての精神的健康

マスローは成長動機により動機づけられたパーソナリティを精神的に健康とし、そのような人々「自己実現的人間」を研究[9]した結果、彼らに共通した基準を提案した。順に、①現実認知の正確さ（perception of reality）、②自己、他人、自然の受容（acceptance）、③自発性（spontaneity）、④問題中心性（problem centering）、⑤孤独性（solitude）、⑥自律性（autonomy）、⑦新鮮な鑑賞力（fresh appreciation）、⑧神秘的経験に対する感受性（peak experience）、⑨協同社会感情（human kinship）、⑩親密な関係（interpersonal relationships）、⑪民主的性格構造（democratic character structure）、⑫手段と目的の区別（means and ends）、⑬ユーモアのセンス（humor）、⑭創造性（creativity）、⑮文化に組み込まれることに対する抵抗（resistance to enculturation）の15個である（Ibid.pp.203-228.邦訳pp.228-264.）。

各基準は後半の実証的調査で利用されるため、少し詳細に検討しておこう。①は、主観的な思いにまどわされることなく、「絶対的に存在（absolutely there）」するものを正確に認知することをいう。②は、たとえ欠点があろうとも、自己や他者のあるがままの姿として無条件に受け入れることをいう。③は、行

動、思想などが自発的であることをいう。④は、自己中心的（ego centered）とは対照的に自分以外のことに没頭することをいう。⑤は、集団の中にいるよりも、独りでいることに平穏をみいだすことをいう。⑥は、他人などによる外部の規準ではなく「自らの可能性と潜在能力（latent resources）」という内部の規準により、自律的に行動することをいう。⑦は、日常の事柄にも、驚き、インスピレーションを受けることをいう。⑧は、神秘的、かつ重大な経験[10]をしたという確信に、勇気づけられることをいう。⑨は、人類を自分と同等に、あるいは兄弟姉妹として共感することをいう。⑩は、自分という狭い境界を取り払い、他人との間に親密な関係を築くことをいう。⑪は、階級、受けた教育の程度などに関係なく、誰とでも親しくできることをいう。⑫は、目的のために手段を従属させて行動することをいう。⑬は、人間の愚かさを諭すような哲学的なユーモアをみせることをいう。⑭は、いわゆる天才（geniuses)と呼ばれる人々のもつ先天的な才能ではなく、全ての人がもつ独自な可能性が現れた状態をいう。⑮は、自らの内面性（certain inner detachment）を保つために慣習的なものをあまり必要としないことをいう。

以上のような要因をもったパーソナリティをマスローは精神的に健康ととらえる。

4．精神的健康の実証的調査

（1）調査方法

これまで考察をおこなったオルポートとマスローの精神的に健康なパーソナリティ基準の妥当性を検証するため、質問紙による調査をおこなった。

まず、オルポートの基準を用い、「成熟したパーソナリティ目録（Allport's Mature Personality Inventory：AMPI）を作成した。また、マスローの基準を用い作成された「自己実現傾向質問紙（Enomoto Self-Actualization：ESA-30Ⅱ）」（榎本・林・鈴木，1986）を併用した。AMPIとESA-30Ⅱにより「精神的健康」を測定した。同時に、情緒障害の判別基準である日本版コーネル・メディカル・インデックス（Cornell Medical Index-Health Questionnaire：CMI）（金久・深町，1972）を実施し「正常群」と「神経症群」に分類し、正常群にみられる精神的健康の要因を明らかにした。さらに、異なる４つの年齢群を比較し、精神的健康の発達プロセスを検討した[11]。

ｉ）調査対象者

大学生および成人男女（会社員、公務員、主婦など）を対象とした。有効回答総計は533名であり、青年期（18～29歳）、壮年期（30～44歳）、中年期（45～59歳）、老年期（60～75歳）の４つの年齢群に分類した。各年齢群の内訳は、青年期132名（M62，F70）平均年齢 20.8歳、壮年期147名（M98，F49）36.8歳、中年期117名（M63，F54）51.3歳、老年期137名（M97，F40）67.8歳である。

青年期の年齢群では大学生が中心である（大学にて有効回答115部)。また、壮年期・中年期は社会人、主婦などが対象となっている。老年期は老人大学の学生が中心である（老人大学にて有効回答105部)。

ii）調査期間と実施の手続き

調査期間は2000年11月である。調査を実施するにあたり、青年期・老年期の主な対象は、集団でおこなった。壮年期・中年期は知人に配布、回収を依頼した。

iii）調査尺度

a．成熟したパーソナリティ目録（AMPI）：オルポートの６個の基準に関する記述を吟味し筆者が作成。５件法尺度（１～５点)。

b．自己実現傾向質問紙（ESA-30Ⅱ）：マスローの15個の基準を基礎に作成されたもの。各基準が２項目づつあり、計30項目から構成。５件法尺度（１～５点)。

c．日本版コーネル・メディカル・インデックス（CMI）：ニューヨークのコーネル大学にて作成された健康調査表が原作であり、日本版は、情緒障害の診断として改訂。質問内容は、「身体的項目」と「精神的項目」から成るが、本研究では「精神的項目」を用いた。精神的項目は、不適応感、抑うつ、不安、過敏、怒り、緊張の５つの内容から成り、計51項目から構成。「は

い」あるいは「いいえ」による回答。

(2) 調査結果

i) AMPIの尺度化－項目分析と信頼性の検討－

AMPI尺度について因子分析を行った。主因子法による因子分析をおこない、5因子を得た。Varimax回転後（Table 1）、因子負荷量が .30に満たない4項目が削られ、残る39項目について解釈した。項目内容から、第1因子を「統一した人生観」因子、第2因子を「情緒的安定」因子、第3因子を「暖かい対人関係」因子、第4因子を「意識の拡大」因子、第5因子を「自己客観視」因子と名づけた。因子分析の結果から、質問紙の作成時に想定された6因子ではなく、5因子構造をもつことが確認された。

また、尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を調べたところ、統一した人生観尺度は .82、情緒的安定尺度は .82、暖かい対人関係尺度は .76とほぼ充分な値が得られたが、意識の拡大尺度は .64とやや低めであった。また、自己客観視尺度は、.36という数値であり、因子と確定するのは不充分であるが、オルポートの「成熟したパーソナリティ」の基準に対応した項目があがってきているため、本調査にかぎっては、因子同様に扱うことにした[12]。

Table 1 AMPIの因子パターン行列(主因子法、Varimax回転)

	項目	F_1	F_2	F_3	F_4	F_5
統一した人生観	自分の生き方には、一貫した価値観が働いてる	.733	.062	.030	.095	.008
	人生を方向づける何らかの目標がある	.730	.096	.060	.116	-.059
	「良心」とも呼べそうな、行為を正しい方向へ導く力が自分にはある	.614	.061	.086	.101	.038
	自分が専心する事柄と一体化することがある	.548	.100	-.005	.202	.131
	自分の価値観と生き方には、調和がある	.547	.179	.079	.066	-.080
	達成すべき課題をもち遂行している	.521	.182	.045	.374	.025
	自分の人生には何らかの方向づけがあるため、人間関係において敗北感を味わったり、あせったりすることは少ない	.451	.369	.061	-.138	.098
	課題に対処するための技術や技能をもっている	.437	.381	.018	.280	-.059
	すべての物事には、ある共通した価値がある	.385	.119	.129	-.084	.283
	実力と照らし合わせて、自分の資質をとらえている	.333	.215	.196	.039	.151
情緒的安定	パニックにならずに、物事を処理できる	.210	.681	.085	.144	-.005
	不安、焦り、恐怖などのネガティヴな感情に過敏な反応をしない	.107	.664	.138	.051	.036
	衝動的にふるまわない	.137	.663	.211	.022	.024
	欲求不満に耐えることができる	.137	.576	.148	.145	.184
	気分の善し悪しで、物事のとらえ方が変わってしまわない	.328	.549	.081	-.041	.062
	成長にともない、自らの情緒をコントロールする力が発達している	.170	.535	.257	.083	.046
	不安や心配事があっても、何かに没頭できる	.147	.425	-.046	.254	.245
	自分の意見や感情をすぐ出してしまう	.090	-.407	-.037	.151	.146
暖かい対人関係	友人との関係は、暖かみがある	.159	.004	.566	.114	-.009
	家族や友人は、自分と同様に大切な存在である	.055	.022	.562	.119	-.043
	人というのは誰でも、様々な感情や衝動をかかえている	-.052	-.084	.490	.169	.161
	他人の行動や生き方が、自分のやり方と違っても受け入れている	-.035	.222	.487	.084	-.013
	共感は相手の重荷や迷惑にならない程度におこなう	.120	.251	.463	-.070	.257
	どんなに親しい人であっても、相手を尊重するための距離を保っている	.042	.271	.437	.057	.206
	他人は他人として受け入れている	.140	.242	.430	-.044	.248
	人生は、衣食住や子孫を残すことだけではない	-.006	.068	.418	.167	-.054
	よく見られたいとは思うが、本来の自分と異なる態度はとれない	.241	.011	.322	-.031	.289
	好ましくない性質は、誰の責任(例えば、親の躾)でもなく自分の責任である	.199	.105	.316	-.027	.203
	まわり道をしても避けることのできない障害は、受容している	.112	.132	.301	.196	.157
意識の拡大	成長にともない、自分以外の事柄に意識が広がっている	.107	.150	.248	.468	-.029
	興味あることが、次々と出てくる	.273	.113	.133	.431	.113
	夢中になることがある	.235	-.064	.110	.410	.059
	自分に関連のないような事柄に、夢中になることがある	-.070	-.003	.014	.407	.079
	かつては自分と無関係だった事柄が、今では自分の一部になっている	.146	-.011	.211	.391	-.009
	意義あることは、力いっぱい熱心におこなう	.354	.104	.198	.377	-.014
自己客観視	宇宙の広大さに比べると、自分も含めた人間はとるにたらない存在と感じる	.056	.103	.073	.034	.488
	自分自身を客観的にみて、かっこ悪さ(容姿など)を笑うことがある	-.057	-.166	.139	.086	.400
	自分が価値あると感じたものでも、一時的にむなしく感じることがある	-.113	-.041	.071	.179	.333
	職を持っている[持っていた](主婦業も含む)	.354	.217	-.002	-.319	.319
	因子相関行列	F_1	F_2	F_3	F_4	F_5
		.617	.567	.417	.290	.199
		-.657	.124	.694	-.023	.267
		.228	-.775	.313	.478	.148
		.310	-.222	.100	-.741	.543
		-.198	.118	-.487	.371	.757

ii）CMIによる神経症群と正常群との群間比較

本調査では、日本版の基準を採用し、CMIの質問項目に8個以上“はい”と回答した229名を「神経症群」、8個未満であった281名を「正常群」として2群に分類し、群間比較をおこなった（Table 2）。

a．AMPI得点との群間比較：AMPIの5個の尺度得点の平均値を神経症群と正常群との差の検定［t検定］をおこなった。その結果、AMPIの「統一した人生観」、「情緒的安定」、「暖かい対人関係」では正常群の方が神経症群よりも有意に得点が高いことが示された（$t=6.33$, $p<.001$；$t=9.64$, $p<.001$；$t=3.05$, $p<.01$）（Table 3）。

b．ESA-30Ⅱ得点との群間比較：ESA-30Ⅱの15個の尺度得点の平均値を神経症群と正常群との差の検定［t検定］をおこなった。その結果、ESA-30Ⅱの①現実認知の正確さ（$t=5.22$, $p<.001$）、②自己・他人・自然の受容（$t=4.13$, $p<.001$）、④問題中心性（$t=5.35$, $p<.001$）、⑤孤独性（$t=7.19$, $p<.001$）、⑥自律性（$t=4.86$, $p<.001$）、⑦新鮮な鑑賞力（$t=3.89$, $p<.001$）、⑬ユーモアのセンス（$t=7.60$, $p<.001$）、⑭創造性（$t=3.97$, $p<.001$）では正常群の方が、神経症群よりも有意に得点が高いことが示された（Table 4）。

Table 2 神経症群と正常群の年齢・性別分布

	神経症群		正常群	
	男性	女性	男性	女性
青年期	36	42	26	27
壮年期	19	26	26	69
中年期	26	24	28	35
老年期	43	13	49	21
N	124	105	129	152

Table 3 神経症群と正常群のAMPIの下位尺度得点の平均と差の検定(SD)

	神経症群	正常群	t値	
第1下位尺度 統一した人生観	3.26 (.609)	3.62 (.583)	6.33	***
第2下位尺度 情緒的安定	3.18 (.631)	3.69 (.499)	9.64	***
第3下位尺度 暖かい対人関係	4.11 (.473)	4.24 (.453)	3.05	**

***< .001 **< .01

Table 4 神経症群と正常群のESA-30Ⅱの平均と差の検定 (SD)

	神経症群	正常群	t値	
①現実認知の正確さ	2.88 (.782)	3.23 (.707)	5.22	***
②自己・他人・自然の受容	3.11 (.764)	3.37 (.670)	4.13	***
④問題中心性	3.28 (.883)	3.68 (.757)	5.35	***
⑤孤独性	2.90 (.736)	3.37 (.723)	7.19	***
⑥自律性	3.08 (.818)	3.43 (.800)	4.86	***
⑦新鮮な鑑賞力	3.82 (.844)	4.10 (.741)	3.89	***
⑬ユーモアのセンス	3.06 (.785)	3.57 (.705)	7.60	***
⑭創造性	2.92 (.891)	3.22 (.826)	3.97	***

***< .001

iii）各尺度の発達的変化

a．AMPIの発達的変化：４つの年齢群による年齢段階別の差の検討をおこなうために、AMPIの尺度得点について、年齢を１要因とする分散分析をおこなった。年齢ごとの平均値を多重比較［LSD法］した。その結果、第１下位尺度（統一した人生観）では、青年期から壮年期、中年期から老年期の年齢群の間で、１％水準の有意差がみられた。第２下位尺度（情緒的安定）では、青年期から壮年期の間で0.1％水準、中年期から老年期の間で１％水準の有意差がみられた。第５下位尺度（自己客観視）では、青年期から壮年期の間で0.1％水準の有意差がみられた。(Table 5 , Figure 1 ：１項目あたりの得点平均値に換算した値をグラフ化)。

Table 5 年齢段階別のAMPI下位尺度得点の平均値（SD）

	青年期		壮年期	中年期		老年期
第1下位尺度 統一した人生観	3.21 (.615)	<<	3.44 (.532)	3.49 (.630)	<<	3.76 (.605)
第2下位尺度 情緒的安定	3.18 (.648)	<<<	3.46 (.546)	3.52 (.582)	<<	3.74 (.529)
第5下位尺度 自己客観視	3.02 (.818)	<<<	3.74 (.614)	3.84 (.652)		3.79 (.720)

<<< p< .001 << p< .01

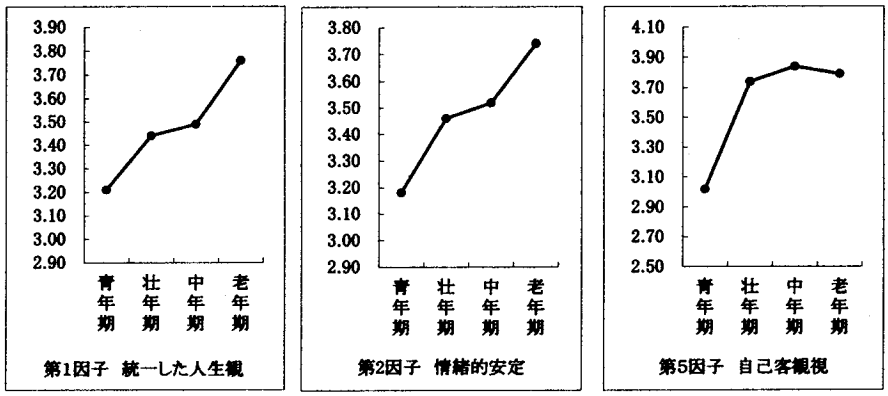

Figure 1 AMPIの発達変化

b．ESA-30Ⅱの発達的変化：４つの年齢群による年齢段階別の差の検討をおこなうために、ESA-30Ⅱの各基準の得点について、年齢を１要因とする分散分析をおこなった。年齢ごとの平均値を多重比較［LSD法］した。その結果、①現実認知の正確さでは、青年期から壮年期の間で１％水準、中年期から老年期の間で５％水準の有意差がみられた。④問題中心性では、青年期から壮年期の間で0.1％水準の有意差がみられた。⑦新鮮な鑑賞力では、青年期から壮年期の間で0.1％水準の有意差がみられた。⑨協同社会感情では、青年期から壮年期の間で１％水準、壮年期から中年期の間で５％水準、中年期から老年期の間で0.1％水準の有意差がみられた。⑫手段と目的の区別では、青年期から壮年期の間で１％水準の有意差がみられた。⑬ユーモアのセンスでは、青年期から壮年期の間で５％水準、中年期から老年期の間で１％水準の有意差がみられた。⑭創造性では、青年期から壮年期の間で0.1％水準の有意差がみられた（Table ６－１,６－２, Figure２：１項目あたりの得点平均値に換算した値をグラフ化）[13]。

Table 6-1　年齢段階別のESA-30Ⅱ各尺度別の平均値（SD）

	青年期		壮年期		中年期		老年期
①現実認知の正確さ	2.77 (.850)	<<	3.03 (.633)	<	3.09 (.723)	<	3.39 (.703)
④問題中心性	3.18 (.963)	<<<	3.69 (.755)		3.51 (.721)		3.64 (.796)
⑦新鮮な感覚力	3.73 (.972)	<<<	4.09 (.717)		4.07 (.686)		4.04 (.721)
⑨協同社会感情	2.87 (.776)	<<	3.13 (.617)	<	3.34 (.739)	<<<	3.70 (.779)

<<< p< .001　<< p< .01　< p< .05

Table 6-2　年齢段階別のESA-30Ⅱ各尺度別の平均値（SD）

	青年期		壮年期		中年期		老年期
⑫手段と目的の区別	3.66 (.850)	<<	3.91 (.738)		4.00 (.756)		4.09 (.722)
⑬ユーモアのセンス	3.14 (.866)	<	3.36 (.632)		3.31 (.785)	<<	3.56 (.757)
⑭創造性	2.76 (.864)	<<<	3.18 (.908)		3.15 (.810)		3.26 (.834)

<<< p< .001　<< p< .01　< p< .05

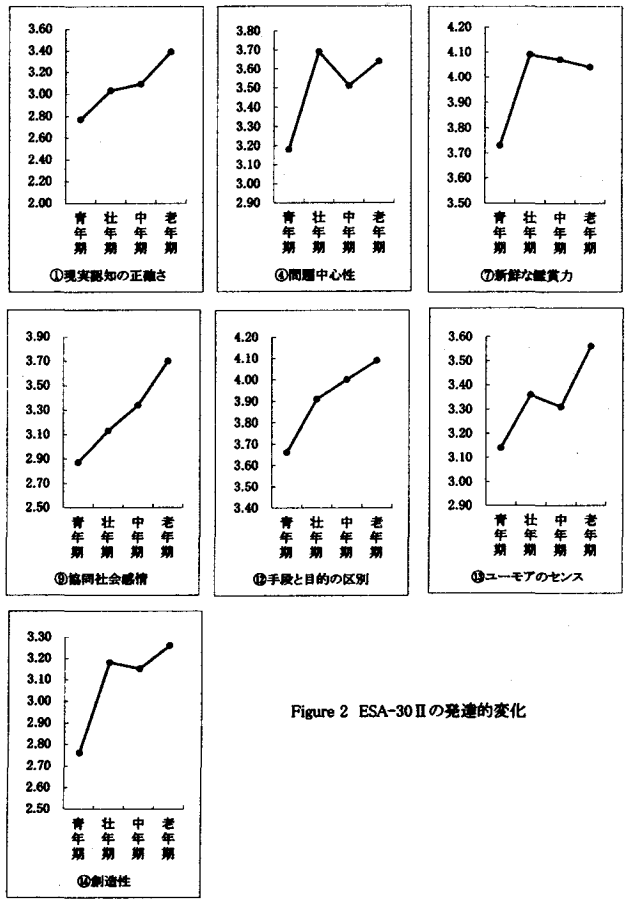

Figure 2　ESA-30Ⅱの発達的変化

(3) 考察

i) 精神的に健康なパーソナリティ基準の妥当性

情緒障害の判別基準CMIを用いて、オルポートとマスローによる精神的に健康なパーソナリティに関する基準の妥当性が明らかとなった。オルポート基準からは、精神的に健康なパーソナリティほど、情緒的に安定していて、また統一した人生観をもっていることが示された。また、他者との間に暖かい人間関係が築かれていることもわかった。他方、マスロー基準からは、精神的に健康なパーソナリティほど、社会や他人から離れ孤独を求める傾向があるが、同時にユーモアのセンスに優れていることも示された。また、現実を正確に認知し、何らかの課題に取り組み、自律した存在であることも示された。さらに、自己、他人、自然をあるがままに受容し、新鮮な鑑賞力をもち、創造性に優れているなどの傾向もうかがえた。

ii) 精神的健康の発達プロセス

異なる年齢群の比較を通じて、オルポートとマスローの基準の発達プロセスを検討した。オルポート基準では、統一した人生観、情緒的安定の要因が、青年期から壮年期、中年期から老年期の間に顕著な発達をみせることが示された。また、自己客観視の要因は、青年期から壮年期の間に顕著な発達をみせた。マスロー基準では、現実認知の正確さ、問題中心性、新鮮な鑑賞力、協同社会感情、手段と目的の区別、ユーモアのセンス、創造性といった要因が、青年期から壮年期の間で顕著に発達することが示された。特に、協同社会感情は、すべての年齢群を継続してこの意識が育まれる結果となった。以上の結果から、オルポート・マスローの指摘どおり、精神的健康の要因の多くが青年期以降の加齢を通じて、パーソナリティに実在していく事実が明らかになった。

5. おわりに

本稿では、G.W.オルポートのパーソナリティ論、A.H.マスローの動機づけ理論を基軸として、パーソナリティの精神的健康の概念の検討と、実証的調査をおこなった。両研究者の概念からは、パーソナリティの内部には自らを高め成長へと導く潜在的な力が備わっていることが明らかとなった。また、その内部に秘められた力により統合されたパーソナリティこそが独自な存在であり、健康な精神性を養っていると結論づけられた。他方、実証的調査において、神経症群と正常群の比較から、オルポートとマスローにより提案された精神的に健康の要因が実在するということ、さらに、その健康要因は青年期以降の加齢とともに発達する傾向にあり、たとえば「統一した人生観」の確立といった形で、人々の生き方に実際に反映していることが確認された。このような実証的調査の結果は、オルポートとマスローの指摘したパーソナリティの内部に存在する自らを高め純化する潜在能力が、発達とともに外化していく事実を実証したことになろう。

ところで、世界保健機構（World Health Organization：WHO）は、1998年にWHO憲章の「健康」の定義を改正する提案をおこなった。提案された定義は次のようなものである。

「健康とは、単に疾病がなく、病弱でないというだけではなく、身体的、心理的、精神的、そして社会的（physical, mental, spiritual and social）に良好な状態が活発に関連していること（dynamic state）をいう」（WHO,1998）

改正点は、健康の条件に“精神（spiritual）”のレベルが加わったこと、そして健康は多様な側面が“活発に関連した状態（dynamic state）”であると強調されたことの二点である。実はこれらの点を心理学的に概念化したのが、本稿の主題としたオルポートとマスローによる研究ではないかと思われる。つまり、オルポート、マスロー両研究者のとらえた精神的健康とはまさに、WHOが新たに加わえた“spiritual”なレベルでの健康を意味する。彼らは、パーソナリティのもっとも深淵な部分、“spiritual”な部分には自ら高め、純化する働きが存在し、これにより、個人は自らの精神的健康を享受していくことができることを示

した。さらに、両者が指摘したパーソナリティの完全な統合とは、より具体的にいうならば、WHOの改正にみられるように、身体、心理、社会、そして精神の全てのレベルが“活発化（dynamic）”された状態と解釈される。

しかし、このような精神的健康の概念も、日本では古来より仏教などの精神思想に現されており、実は西洋人よりは日本人にとっては身近かな精神性であるとも推測される。今後は、このような文化的要因も含め、オルポートの研究態度にあったような広い観点に立脚して、パーソナリティの精神的健康についての考察を深めていきたい。

【註】

1）“instinctoid”は、マスロー自身による造語である。「本能、生得的な行動傾向」を意味する“instinct”と「…に似た、…のような」を意味する“oid”から成る。*Motivation and Personality*の第3版（1987）の解説では、「成長動機の性質は、まるで本能のように固有であるが、本能そのものと区別するためにマスローは“instinctoid”という用語を作成した」と説明されている。（引用については、翻訳書を参考にしながら、自分で訳出を試みた。以下も同様である）。

2）本稿が考察するオルポートとマスローによるパーソナリティ・モデルの基準は、実在の人間に確認できるというものではなく、もし成長が完全に完成したならば（そのようなことは実際にはありえないのだが）、普遍的に認められる傾向であるとし、「理想の人間（ideal person）」の基準として提案されている（Allport,1961,p.277.邦訳p353.）（Maslow, 1954,p.127.邦訳p.225.）。

3）普遍的標準、個人的標準の研究に関しては、本稿が主に取りあげた*Pattern and Growth in Personality*が適書であるが、集団的標準の研究に関しては、偏見やデマ、紛争、宗教などの環境や文化の要因が、1960年の*Personality and Social Encounter*の中でより詳細に検討されている。

4）オルポートは、「完全に成熟したパーソナリティのもつ独特の豊かさと調和性（distinctive richness and congruence）を記述するのは容易なことではない。成長する個人の数と同じだけの数の成長に至る道程があるため、健康な成長の最終成果はそれぞれ独自である」とする（Ibid.p.276.邦訳p.352.）

5）オルポートは動機をパーソナリティの「発電気（dynamos）」と呼んでいる（Ibid.p.57.邦訳p.276.）。つまり、パーソナリティ形成は動機の働きによる。このため、動機をもたない新生児にはパーソナリティも存在しないことになる。実際に、オルポートは「新生児にパーソナリティがあるとはいいがたい」と述べている（Ibid.p.57.邦訳p.71.）

6）価値観（values）、理想（ideals）ともいいかえられている（Ibid.p.57.邦訳p.297.）。

7）1937年の文献では、①自己意識の拡大、⑤自己客観視、⑥統一した人生観の三つを成熟したパーソナリティの基準としていた（Allport,1937,pp.213-231.邦訳pp.187-202.）。この三つが中核になっていると推測される。

8）マスローが人間あるいはパーソナリティの代わりに頻繁に用いる言葉が「有機体」である。特に、Motivation and Personalityの動機づけ理論の章では、動機づけされたパーソナリティのイメージを具体化するために意図的に用いていると思われる（Maslow,1957,p.80.邦訳p.56.）

9）マスローはこれを「心理学的健康の研究」と呼ぶ。この研究は次のような方法で実施された。被験者を選択する基準として負の基準と正の規準を設けた。負の基準では、ロールシャッハテストなどを使って神経症、精神病などの強い疑いのある者を省いた。正の基準では、面接調査などを通じ自己実現のはっきりした証拠のある者を選び出した。この正の基準には、被験者が、過去あるいは現在において、既に基本的欲求を満たしているという条件も含まれていた（Ibid.p.200.邦訳p.223.）。

10）マスローは神秘的、重大な経験を「至高経験（peak experience）」と呼び、自己実現をおこなっている人々の特徴と考えた。*Religion, Values and Peak-experiences*の中で詳しく論じている。

11）オルポート、マスローともに、若者よりも年輩の人々に、成熟あるいは自己実現をしている傾向があるとする（Allport,1961,p.277.邦訳p.353.）（Maslow,1957,p.199.邦訳p.222.）。このように精神的健康の発達と年齢差は関連があるととらえている。他方、男女差に関してはオルポートもマスローも特に記述しておらず同等にとらえていると思われる。

12）本稿では紙面に限りがあるため掲載しないが、AMPIとESA-30Ⅱ、AMPIとCMI、ESA-30ⅡとCMIの相関［Pearsonの相関係数］を4つの年齢群を込みにして分析済みである。結果の一例として、AMPIの「統一した人

生観」とESA-30Ⅱの「自発性」、「問題中心性」、「創造性」の間、AMPIの「情緒的安定」とESA-30Ⅱの「問題中心性」、「ユーモアのセンス」の間に強い相関がみられた。

13) CMIの発達的変化も同様の方法を用いて分析済みである。6基準のほとんどが青年期から壮年期の年齢群の間で有意差がみられ、下降する結果となった。

【引用文献・参考文献】

Allport, G. W. 1937 Personality: a Psychological Interpretation. London:Constable and Company ltd
オルポート,G.W. 1982 詫摩武俊（訳・編）『パーソナリティ 心理学的解釈』 新曜社

Allport, G. W. 1955 Becoming. Yale University Press

Allport, G. W. 1960 Personality and Social Encounter. Beacon Press
オルポート,G.W. 1972 星野命・原一雄訳 『人格と社会との出会い』誠信書房

Allport, G. W. 1961 Pattern and Growth in Personality. New York:Holt, Rinehart and Winston
オルポート,G.W. 1968 今田恵 監訳 『人格心理学』上・下 誠信書房

Allport, G. W. 1968 The Person in Psychology. Beacon Press

榎本博明・林洋一・鈴木貢 1986 青年期における自己実現傾向について(1)－自己実現質問紙作成の試み－日本社会心理学会第27回大会発表論文集 131-132頁

榎本博明・林洋一・鈴木貢 1986 青年期における自己実現傾向について(2)－女子短大生の自己実現傾向－日本社会心理学会第27回大会発表論文集 133-134頁

D・シュルツ、上田吉一 監訳 1982 『健康な人格－人間の可能性の七つのモデル－』 川島書店

本明寛 1990 「健康心理学に期待するもの」『社会心理学研究』第5巻2号 75～82頁

伊藤美奈子 1993 「個人志向性・社会志向性に関する発達的研究」『教育心理学研究』41 293～301頁

金久卓也・深町建 1972『コーネル・メディカル・インデックス』三京房

鎌田靖子 2001 「パーソナリティの精神的健康についての考察－概念の検討と実証的調査を通じて－」『大阪大学大学院人間科学研究科修士論文』（未公刊）

小此木啓吾 1969 「心身医学におけるCornell Medical Indexの研究」『精神身体医学』第9巻2号115-122頁

Maslow, A. H. 1954 Motivation and Personality. Harper and Row, Publishers
マスロー, A.H. 1971 小口忠彦 監訳 『人間性の心理学』 産業能率短期大学出版部

Maslow, A. H. 1964 Religions, Values and Peak-Experiences. Kappa Delta Pi
マスロー, A.H. 1972 佐藤三郎・佐藤全弘訳 『創造的人間』 誠信書房

Maslow, A. H. 1971 The Farther Reaches of Human Nature. Viking Press
マスロー, A.H. 1973 上田吉一 訳 『人間性の最高価値』 誠信書房

長島貞夫 監修 1983 『性格心理学ハンドブック』 金子書房

高井範子 1999 「実存分析的視点による生き方態度の発達的研究 －実存的生き方態度インベントリー（EAL）による検討－」 『大阪大学教育学年報』第4号,101-114

Taniguchi,F. 1999 "Self-forming Structure of Nature&Man, and Human Recognition of Environment" The Journal of Konan University Faculty of Letters No.110

上田吉一 1988 『人間の完成 マスロー心理学研究』 誠信書房

World Health Organization 1998 "Health for All in the 21st Century"
http://www.who.int/wha-1998/in wha Eb intro.html

A Study of Mental Health in Personality: an examination of concepts and the results of quantitative research

KAMATA Yasuko

Firstly, this paper's aim is to study mental health in personality by examining the concepts of Gordon W. Allport's Personality Theory and Abraham H. Maslow's Motivation Theory. In these theories, Allport regards personality as "a being with unique potential for growth", while Maslow regards growth motivation as "a higher nature" and that this higher nature is "instinctoid", i.e. part of the person's essence. Both Allport and Maslow established their own ideal models of personality known as "Mature Personality" and "Self-Actualizing People" respectively. They also proposed criteria for establishing their personality models. In this paper these criteria are foucussed on.

Secondly, the results of quantitative research are reported. In order to measure "healthy mentality", this study utilized two questionnaires based on the Allport's Mature Personality criteria and Maslow's Self-Actualizing People criteria. In addition, in order to measure "unhealthy mentality" the Cornell Medical Index Health Questionnaire was used which is a scale for distinguishing neurotic from non- neurotic. From the results of these contrasting questionnaires the differences between healthy and unhealth personalities became clear. For example, a healthy personality possesses factors such as "emotional security", "unifying philosophy of life", "non-hostile sense of humor", "preferring solitude", "more efficient perception of reality", and "problem centering". This study also investigated the development of mental health through the comparison of different age groups. The results showed that the period from Adolescence(18-29 years) to Young Adulthood(30-44 years) and from Adulthood(45-59 years) to Mature Age(60-75 years)were important for developing various factors of health.